

くまとの  
文化財

県指定重要無形文化財

＝清和文楽人形芝居＝

上益城郡清和村



清和文楽人形芝居は、今からおよそ百三十年前（嘉永年間（一八四八—一八五三）清和村（当時の平野村、大川村）に君大夫ほか六名の浄瑠璃語りが出て、村をあげて練習に励んでいたが、その村人の中の好事家により、巡業中の人形座から人形を買い求め、技法を習い一座を組織したことに起源をもち、昭和二年、今上天皇の即位を記念し、大昭座として発足したものである。

保存会は、会長春木穂一以下十七名からなり、過去四十八年間に百五十六回の上演記録をもつ県下唯一の人形芝居保存会である。一の谷嫩軍記、鎌倉三代記、絵本大閤記等八題のレパートリーをもち、毎年九月一九日に行われる同村大川の阿蘇神社に奉納されるのをはじめ、県内各神社、老人会等の要請により上演されている。

写真は、一の谷嫩軍記熊谷陣屋の段三の一幕の名場面である。

（昭和五十四年十月八日指定・認定）

明日の熊本 私の提言

ボランティア集団としての県婦連

熊本県地域婦人会連絡協議会長

坂田 登貴子



県内十一市十二郡の各地域婦人会の連絡協議会としての県婦連は、創設してすでに三十五年になりますが、世づくり人づくりを目標に、ボランティア精神を核に一貫した活動を続けております。

子供の教育問題、環境美化の問題、政治を明るくする問題等を始め、物価、公害、交通などを含め、特に社会福祉のことが強く叫ばれる今日、ボランティア活動は愈々その要請の度を高めてまいりました。

去る年度末の総合発表会で、寝たきり老人に対し十年間も身の廻り一切を世話している菊池の今村和子さん、八十七歳の今日に至るまで会員の一人として、地区公民館に生花の奉仕を続けていられる山鹿の迎田アサオさんの二人を表彰いたしました。これらの行為は活動のほんの一端で、前述のような各分野に亘り広く細かく活動の手を伸ばしております。

もともとボランティアとは、社会のために「自ら進んで参加する」ことであり、それが個人であれ団体であれ、「行政の時間的空間的ずれを埋め」ていく活動に外なりません。

私たちは、国の方針に従いながら、県のご指導のもとに、任意団体という自由な翼を拡げて、年間の具体的目標と計画の線に沿って活動を進めております。

五十五年度は、①組織の強化をもとに、②確かな調査をふまえた上で、③青少年の健全育成、④生活の安全と安定の確保、⑤資源の愛護、⑥健康問題等の努力目標を掲げ、⑦日赤奉仕団員としての実をあげると共に、⑧婦人の地位向上を図り、⑨正しい政治の実現への協力とPRに努めることにいたしております。

これら活動の成果を挙げるために、私たちは、県婦連本部と婦人会館と生活協同組合の三部をかなえの足として支えあう組織をもっております。すべてを統轄するのは勿論会長ですが、この三本の鼎の足にはそれぞれ理事の分轄担当する部会が設けられて運営の責任に当たり、三つの事務局にはそれぞれ事務局局長をおいて事務の遂行に努めております。

県婦連本部は、県婦連活動の広汎な運営一切を司り、財務・調査・広報情宣・

企画の四委員会を設けております。

婦人会館は財団法人組織で、会員の研修は勿論、公益事業としての一般への開放にも便し、宿泊・結婚式その他諸展示場など、研修・学習・交流等の文化的事業への奉仕に活動いたしております。

生活協同組合は、社団法人で四十八年に発足し、ようやく軌道に乗りにかかったというところですが、生協本来の「品質を確保し、低物価を維持していく」といった基本線に沿いながら、物価問題のやまましい今日、大きな役目を果たしております。と共に県婦連の教育事業と共催して、その財政面への潤滑油的役割をいたしております。

このようながっちり組んだシステムの上、的確な目標をかけた運営ではありませんが、問題は年を追うにつれてふえ、目標への距離はなかなか簡単に縮まるものではありません。国際婦人年を機に、男女同権が叫ばれ婦人の地位向上の問題が大きく取りあげられてはおりますものの、紅一点の県議の席はゼロとなり、三百十八名の市議、千四百十八名の町村議の中で、婦人はそれぞれ僅か四名と五名という現状（五十四年一月現在）であり、婦人の経済的地位に至っては、まさに錦袖の一触にすぎないといっても過言ではないと思えます。

従いまして、これら活動の橋頭堡をつくる一助として、会長研修・支部長研修の宿泊学習を実施すると共に、毎年四五の郡市に指定学級を設けて年度末にその発表をお願いし、成果を確認しあって目標への一里塚を築いております。

しかし、ボランティア活動は、それが個人的であれグループや地域的であれ、「私とあなた」の人間関係から出発するものでありますから、この人間関係が確立していることが第一の基本であろうと思えます。

この「私とあなた」という人間関係の上に立って、福祉国家とか福祉社会とか次元の高い志向まで拡げてゆき、それら行政の手の届きかねる谷間谷間に「人間愛」の手を伸ばしていかねばならないと思えます。

してみると、青少年問題にせよ、環境問題にせよ、物価・公害の問題にせよ、マンツウマンの問題は別として、県婦連という一つの組織体だけでその効果を期待することは無理であります。私たちが常に行政の志向とタイアップしながら、他団体との協調を密にし、特に会員相互の連帯を固めることに努力してまいります。そのためにも外なりません。地方の時代と呼ばれ心の時代と言われる今日、人間疎外の風潮に抗しながら私たちは、愈々ボランティアへの情熱を傾けたいと存じております。